花之夜
全

ロ 9
3899

ひとへ衣之序

いその上ふるき世よりぞゆきゝる島大和ことば
志るせるふみども夏の志げりて志げく
侍までし。日本紀のみだひをはじめとして。蓼舎
物語の志なおぞおほかる。其中よ萬葉集
ちぐ人の志らまごころともうつくさしのまへべきう
ふもいろ〳〵の外にことよりもおやふかいつ
詠て花鳥の色音ふともまよりつゝ無量
ふでどりくおのまでどとりておのがめづらふ。
まどのうちの鏡とせよしておのまよふてん

早稲田大學圖書
氏家所藏
門 ロ9 號 3899 卷
早稲田大學圖書館 昭27.6.25 受 藏書

教へぐさもおのがものするがごとくにてしさくべく
唐ぶみの中に曹大家といふ刀自ぞこれのほま
しめを七つのくだりにわけ給へるものぞ
いとうるはしくおかしきことを大和ことにうつし
かへりまた此書のうるはしくさることもいろい
そけおらしてて廣くよしあしぶをまむりのき
せむやしに海人のたくなはくりかへしつくあら
ざまの年のいとながくぬよけにおもひとりし
がりそへつよおや君大人にあきえていつまき
ひさしくおうおもひしかどいきり給ふにやがて

ださまを七つのくだりにさるそしくどりともい
はけて女房絵へりぞやうことをもろこしのまふく
しめおきさていづくよまして虫とる茶をと
あさむいかりしらりのからふもそむき給ふれど。
やがてさらにまよありつけむてしともの
給ふ文武文をもと心しを名付よし八條そで
もかくしらふふかむむをくるしそりかね七年
のえ寅とふとし此長月のみ井にてまちある

一重衣

操(こころばへ)教(をしへ)るむとりの条(くだり)

いさゝや（いさゝハ何事といふをばかり。万葉巻の十二 いさゝいふはなどよあり。そのおふもえず。）女(をんな)の操(こころばへ)といふハ。（操ハ正面(まさか)なりぞの給へかれ たゝもちといふ）心(こころ)そ毛(け)乃すゑばかりもをぐらかさゞれ。（毛の末ばかりハ少(すこし)もといふ詞なり。日本紀毫末の字を用ふ。をぐらかれハ小暗(をぐら)もなり。かげくらきをいふ。古今集にみえたり）ゑしてする（直風俗）まほ（正面）なるむことはれなるべし。かく（古言またまく此詞とよめり。これめもかくれといふ言なり。）らバ何ごとも違(たがひ)めらむ。さりとて（然有）なかてまつれ。（何ごとも皆と といふ言なり）みなとおもはれ（物事に多き言之。すれおそろしき事之。）その筋(きぢ)乃理(ことわり)とまいふかし。（日本紀兵刑をおびやかと よませたりとさまかりなる）世(よ)の掟(おきて)にもしうとくて。心むとりにおりひめぐらさバ。おのが操し立(たし)むと

なりひて。志(こゝろざし)ハ致(いた)したり。すハおやまさりといふ
ゑびめもいでゝ。かくて人乃さめもらしく文
釈(たや)すからぬも 一毋同産これとならぶからといふ。今ハたゞ兄弟のことなり。 歎(なげき)をなふまる
罪(つみ)なき此やまゐしてむ。これハ女公のむとをぢにせまりて。我身の実を立ることとのこれりひでつる
小才をうしなひなどし。よりてこそりにそむき。世のおきてにもたがうでほの まざりひとまさむこととい之 △志てむといふハ。唯まことの句とのべたるなり
よて よてハ仍てといふ言なり 世にすてらむ人ハ。たらておろえといふ言なり まけ
かな筋(すぢ)の教(をしへ)なくハあらじ。ことさへぐ唐(から)書(ぶみ)
にハ。ことさへぐハ唐といふ言(ことば)の発語(はつご)なく いま枕言冠辞などいふこれなり。ハさやぐとかしましきといふ事にて人の言ハかしましくきこゆるなり 唐とはいふ之
教(をし)へざるハその子を愛(めで)ざるなりと侍り。○古文前集抄 毛由勧学文ニ
父母養レ子不レ教是 不レ愛二其子一也
然有 さるハ。男(をとこ)ハその学(まな)びはうさくと

も。よきくく 長(をさ)といふ言なく物を数(あつ)る言なれハ おのづから大凡(おほよそ)といふ言なり。世の中す
まじらひは。かくるまぢハ是が為さわり。こゝそ 交
理(ことわり)またがふまじ。たのばらも耳(み)にふれてもよく 辨
まふべし。されハむさやおりまく。○直家隠(ひさやこもり)内の事を云
為しくかしばしくなどハ。○恐着(かしづく)なりいそ物はしの人の情のかしづくなどいふもまさにかくそだてゝ人目
みちとりけりと 世(よ)の掟(おきて)にも理(ことわり)もなかりねバ。すれあ
よりてハたどろきまどひ。唯(たゞ)とまちにと物を
あやまてるも多くなり。○多くハたぶくといふ言之 この故に班昭(はんせう)が
女刀自(こじ)ハ女誡(ぢよかい)にも物を作りて。辞もごろに教(をしへ)
給へるなり。
班昭ハ扶風の曹世叔が妻。同じ郡班彪といふ人の娘之。名ハ昭、字ハ恵班又の名ハ姫といふ。そのうまれ才たりて芳

のまゐりいと正しき丈の世叔世を早うしれバやりめにくその姑につかふることを
いとよし。丈見ろ班固・漢書を作り其をはらざるに身まかりよりて帝のみかど
よりみことのりありて此班昭に其ほうを書つがしめたまひしばしば大宮の内
にめされて女達に人を教へさせたまふ昭のちに大家と称ふ又席にかくるべく
こうち死ぬべくたりひれバ女誡七章を作りて諸の女乃教とれ。△称も
おろハ今云孫むごろ之△刀自ハ戸知にて家をまもるといふ言なれバおづかが
めていふかへよつくことばなり

又此の御書をもいまし人
よりほ乃世によかけて○標立し女達乃作りけるを
ども○おほくれ書どもみもかさのまり。○女四書本朝烈女傅なめ但それもいづれの去事
さる八女子にて子ならむ人八○大倭も唐のとも○女の
標立しよれ例どもハ○もはらに教へのふべきことぞ。
よくさる例どもを耳に觸れなば○すといふ國
まとひ出るべく○たよくまもれなむこともはりになり。

世の読ともするべき節も侍るべかめれ。へんれと云註とのへたる言なり妄
に我 御書れいまし人に侍りし○勇ある女達乃例どもを○
まちこち今云あちこちといふ言なり出むして女をとどもいふるむねへて
ならじといふ代教侍るなり。○実に昭刀自れやのごと
く○女の道ハ唯順の一つになりて○まろも甚よく明らかなるハ○
もし勇れ氣ありバいふこと有れバ○勇みさ附てよく袖を
堪忍び○或ハ破り或を背く○死ぬべきことも國を
うしなふ。○男のことにならて悲しきにないこの御書の風俗にて、志ろそ
勇れむと川ぞ人乃心の寛なり○さき此 御書の
心がらなるむねなりける。
△さきの言ハ果してといふ言なり

秋せこハおれ
おりひそことし
あしハ太みを
みりみも
ろ残おう朔くよ

ゐかくく
姉うちおしむ
ちうえやし
石ハふむとも
秋ハ
かくり
ゆみて

かようくれ
おハおもそれ
記く人乃
うは
墨絵れ
たく
ひとみち
えりし

西乃帝よ
たく部とりいてく
めおらかれ
うつしきぬ
乃
あれし
こって
うも

ふたつにハそれ達の教をいふ二の宗

世にふるくおこなはれしまゝにそれだちハ。女はこゝろさとりなき

位の級をいふにはあらず。すべて上ざまの人ハ女達を守。なりてよく八政をもきこしめしハ

御もまつるまで。そのよれ御採どりのおたさぬハなと

おほしけるまで。おやしきハ大丸しおそ おもはるゝ言ゆへまげその事

なれにおこし給てそ綸文に下がかり給めぐましひ

のゆるし。但此むかしもむさる人くのほみさかり

なるべし。

男のに生ハ少きけ深くれをさんも。おんやけの掟どりしまで

りのなきハゆゑにおぼ給すとも。おしく八まつるひがりまゝ

もまづむ女だ女のに生よりつりをまげくも恵深く御給あられをたまえ

とりふるりたく人下ざ給も深き。そのなよさ川べきりのをバさる給これを

のゐをくそへく。性根手足のごとくおりひなるりけ人とおそりされを

上ゑさ川女のこゝろとりいふ。

むかし長谷朝倉の宮乃御宇（雄略天皇）葛城山に御

猟させ給ふ時。小竹原鳴さやぎて牛のごとき猪見

はしり出づ。天皇舎人にのたまひて彼を射よとのたまへれ

ど舎人おぢおそれて木のうれに逃のぼりしを。猪

すでにかの舎人をくらはむとせし。御よおほいにいかりさ

て給ひよみそくなかりし。后聞めしく嘆しとたまはし。

天皇に奏してのたまはく。君が御猟させ給ふハ人民

乃ためにあらずや。猪のさわざよりおこり

て。今此舎人を斬たまはゞ。君そこれ狼にておそさ

給ふとおなじからずやとよく聞しめして。舎人をもゆ

るしたまひぬ。しや人これハ猟して毛物を
獲つ。賤も善言をゑつとのたまひし。かしこけれ
ど此御后の御心にしもあえたまひけむや。

こゝハ日本紀によるなり
いえハいやうなるなり

操練まりてふ数といふ十三の条

こハ上ざまにハなすれたるにハあるべきなれど。首ハそだにいりぬや
ましけむ。此の人にハかいのせなきりけれど下のまにハ
やくもきられバ。みだれがそしと紀筋のいふくなるなり
おのく。さ家さかざより家もみだれぬともろし

なり。人こゝろく。世のまじらひもうとくなむありぬ
ハ。又く女がさの心やまちよりか。まくまぐくにハ心なが
め心。めハハおもふてふ言とのべるなり　然さハ女の罪咎乃有りぬ此あやま
ちにきる心なし。これハ女のとこやうりなるなすれみだれといふなり　さればハ世に
物縫乃心あとあるも。おほく八此密事。
諠ハ。みなく書いのせし。こハ。母のをしへたちの心い
禁さめありとかいはけなくてむが。書様にとるすまめ
こまく。人の心のうごくべき筋どもあれ。どかしく
もはうれにもうちみゆまじバ。これをさ心罪咎
なるを一とハおほりそで。おのはぞうらうれたなる心にて

なりひらなどしともめでまし。其文源氏乃
物語ハむかしめでし人にハ又なき尊き文なり
と。ある人乃のたまひけることありぞかし。文落
窪乃物語りハいかなる女の鑑とも教ともな
べきものなり。そハ善心れ人乃けぢめ。又悪紀
心乃むまのけちえんとを示。始終の数
どもいづくいづら志なしくかいあらはせりごとに其
文乃さまも。源氏の物語りにハまさりたりと。
貴紀御人乃のたまひけるが。げにも此物語と
かうがへよむに。まことにくさきなりける。○落窪物語考。

世にありふれし人なし。これハ継母のはしたなきまひども志さまざまなることにて。
中々みなくたちこれあつかふの心乃ほむ乃にてよくたもしけることと。其孫と
してかけるものから。此冊子の世にはやるもさる人のはやまちにおほくよ
みがたきところなかりけり。

人乃心をあやしむものなりて。万葉集にはちよ
まべ候。
いざ子どもたはぶれせそあめはちの
かためしかぞや国としま孫そ
とはるものひをばいとかしこくもたふとくもた
もいはせそ物語よ。
こひしくは来てもえよかしちはやぶる
神のいさめしたるすなくに

るごとなる事をバ。その紀言も志らで。みだり
に目をとゞめく。まことに神御国の風俗を
志らなりと。おもふさびの人おほし。こまでの
るをもちくぞこれの教ハいかさ様にもなるべき
ことといふなり。

始よなる万葉集の歌ハ閑相菱原朝臣の歌之。此言れ言ハ。ぐざ子どもとさしの事ハ翁行の民なり。たとへバなし。それあめつち乃かさめし世ハ代大倭の国ハ天地乃神の作りかためし国なれバとあり。や偏と志ま祢ハ大八島といふたびひなり。今えいせお作よなる名ハ。秋文の条よ業平朝臣より。枚子かりくことたまふとえたり。ちはやぶるハ神と作づく発語なり。残賊強暴横悪神とかきくちはやぶる神ともよめり。さるハいてりて上つ代のたらぶる神ぶら乃事とぶさしく志らるなり。ほあしハ偏しめるなり。男女乃志のびあふハ。むかしより神も偏しめたまハぬぞといふ言なり。又その紀言をも志らでとふ国ハ天の益人とさへいひて。神の代ハ偏に人乃生じむことをよろこびたまふなり。よてそのすの源を志らバ男女乃名ハかりさくいまれたまハぬと知り。さ国を此事よハ。たのかほりあることを

むさけく。神之人ゆるしたまふことはなるまじ。犬文人乃えなくおしさま八。神の忌垣もこえぬべしてふ事乃こゝろとれ。事拘泥のたぐひハかくなやしれわも偏ぐら久ハ。女子もきらむ人ハ。正しき教をとさするを久れくといふなり。

ちはやぶる御代に。大山祇乃神わかむすめ木花之佐久夜毘売とまをしけるハ。天の御孫邇々藝能義古止に婚志まうひて。たゞ一夜よなむ孕ましけるを。尊ハ其の御種にハあらじと疑ひたまひしとぞ。うたがひをはらさむとおぼして。御子あれまさむとき無戸室を造りて其のうちに入たまひ。うけひたまはく。我もうめる御子。もし天孫乃御子にまさバ。直に此の火に焼らせるむ。正しにてあらむ。

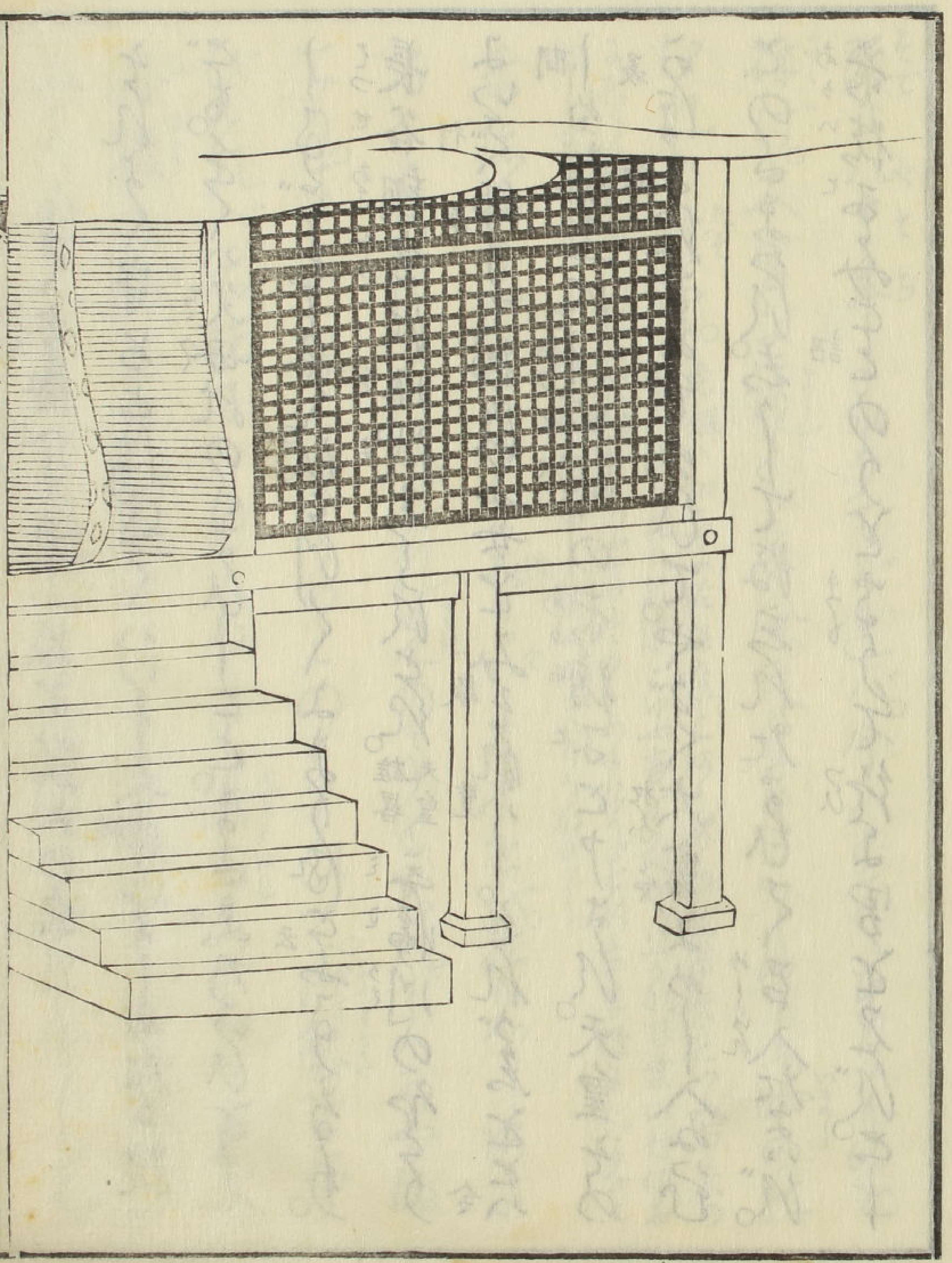
たゞちに何まにませとのたまひ給りく。めぐりに夫
つけくやうしめすに。三柱乃王子を生たまひつかくて
此の中にあましませりとすむ。古事記日本紀にありしことなり ことごとく乃
御操をよくうけまもりたまへとぞいふ。

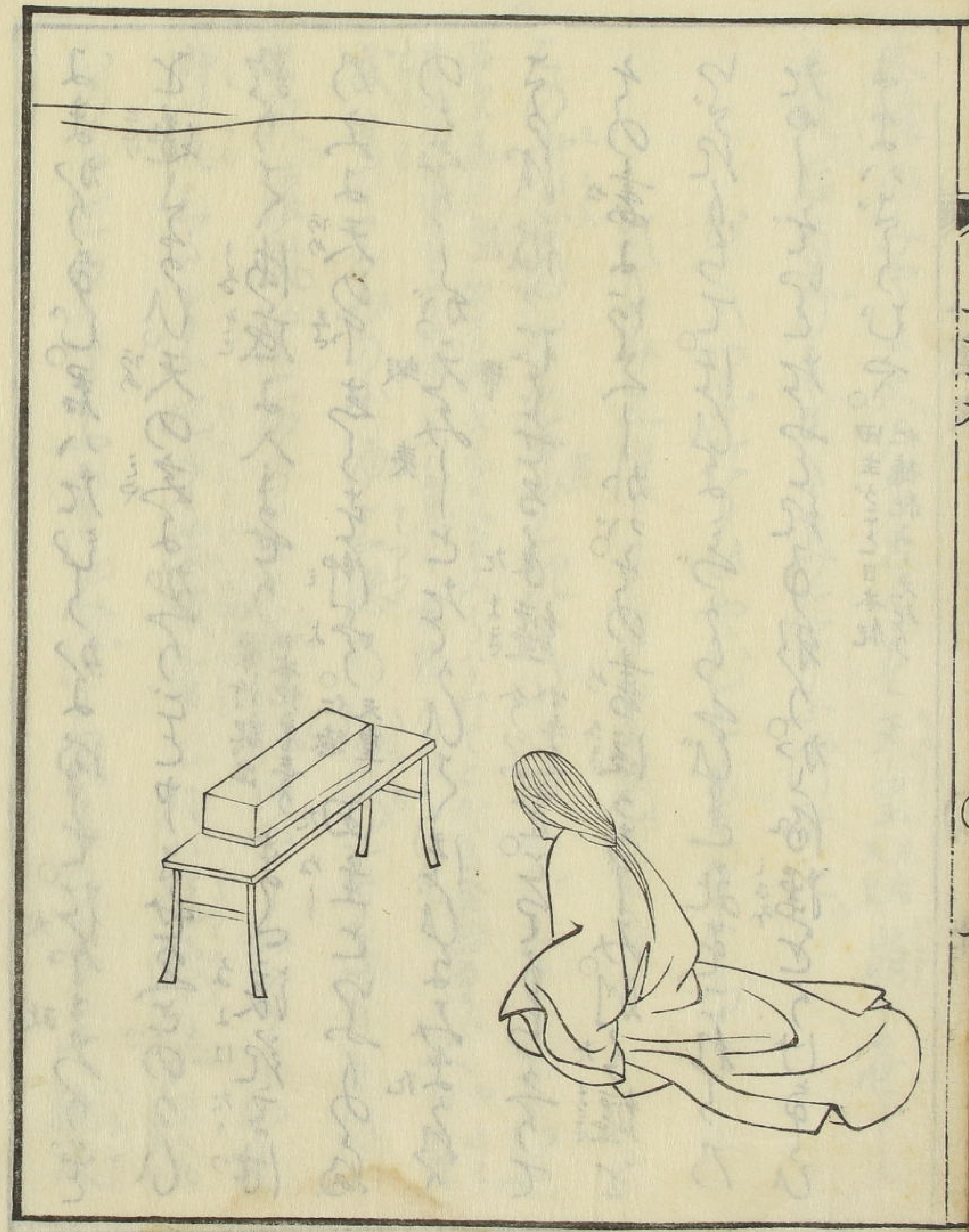
夫をたすくる女の操といふ四の条

あるひハいやしきとも。たすくる随分夫をたすくる事ハ
なけれど。夫をせといふハ夫をたふとめてその名をよばぬが女の礼なりよりて それを略きそれの言ハせとよぶ世に妹と子の言を付ても同じ子ハ指ていふ言也
実の心よりたすけてこそたすけ入らむハいふまでもなし。
それハむかしのみさとりに 凡世の中にならひとして。女の夫にさかふ

さる後ハ。いづく世の理りにせめられまどひ。心の中に悩ひ。
これハやむことをえぬ理りにせめられてたすけぬ夫にそふ也 何事ハ親やのためにし身れた
だきなさまに志るしひよりり。たづきハたよる也 何る八段のたのしき
をたすけて。さしたりてハその夫にきさがふ これハけそふめる女の礼 のれやりめよるりてハ。ふのしみとききむべきことで。だとめく今の夫にそふなり。
たゞひたすくれバ。その
夫がるさむまれ。たとへも其身にさかふハざ後と記を。
いかにもくよく随ひ。又いさゝけるにとふしもいそぐ
られバ。儀よしをもうちそむく後さるハその日比乃心の
はかりそれさらむいてあさ俗しき。たゞ言るも嫌しき
も実乃心能遂ることそいうまほしけれ。を江

大津のみやに天乃下しろしめしゝ天皇(すめらみこと)天智天皇崩(かむさり)ませし
とき。后のなげきてよみたまふ御哥に。
ひとハよし思ひやむとも玉かづら
影にみえつゝわすられぬかも
この御心(みこゝろ)のいとたふとき(貴)事なり。いかばかりなるらむや。
万葉巻の二に出る御哥なり。玉かづらハかけてとかゝる発語なり。
言の清濁をもよくわけざれバ発語乃なるひなり。又日本(やまと)武尊(たけのみこと)。さがみの国ゆ(従)上総(かづさ)乃海(うみぢ)をわたりたまひし
とき。暴風にあひて御船(みふね)ゆくへなかりしかバ。
御供(おとも)したまふ妃弟橘姫命(おとたちばなひめのみこと)。これハ龍神(わたつみのかみ)の御心なれバ
いのちをすて給ふなりとて。海底(うなそこ)
にいりたまふ。君ハたひらかに渡りて大政(まつりごと)
を遂(とげ)たまひ。天(あめ)の宮(みや)にかへりごと申させたまへとの給ひ
終りて海底(うなそこ)に入ませり。景行記に出 日本紀にもあり。また浪花高津(なにはたかつ)
乃宮に天(あめ)の下(した)しろしめす御宇(よ)。仁徳天皇 田主(たぬし)といふもの
のありしが。蝦夷(えみし)とたゝかひてはかなくみまかれり(死)。
さる彼(かれ)がおびせる(帯)手纏(たまき)今いふ小手之をとりもちかへりて
その妻(め)にわたしゝかバ。その妻(め)泣(なき)ゝてみ。則手纏(たまき)を
いだきもちて。ほひにくびれ死(しに)き。これら乃
ためしぞいとたふとき事なり。かの操(みさを)をうけたまひ
さまハさらなりや。田主がこと日本紀仁徳紀にみえたり





よく守るべしてふ教といふ心の条

それよく守るとは。遠くハいにしへゆいましめたる掟ども。近くハ父母のをしへしことゞ。また世のいひをしへしるべどもあまたあり。ひとつくよまりをと云なるなり。

長谷朝倉に御代しらしゝ。雄略天皇三輪川のほとりにいでまして。衣洗ふ女をみそなハし。それが名をとハしめたまふに。引田部の赤猪子と申さく。天皇そのかほよきをめでたまひて。やがて大宮にめし入なむとのたまへり。しかして忘れたまひて召入たまハで。赤猪子みことのりをまもりて終に男とえらんで。とし経て八十年よなりてけれバ。今ハとてかくなりぬるを捧げ。大宮に詣来。天皇さこてめし。汝のむれハ誰や。

> 老嫗ハ和名よ於無奈とあり。のち於布奈といふ。布奈の言ハ波ふれハ。於婆とよふ言をのべていふか。万葉の付仮名よ。たうめとよめるハ。おいをむをとよふ言よくあへり。是は古言様にたよると出し。万葉考てふものよもたまへ。考へよみハとりがたし

赤猪子うけたまはりて然々と申をバ。おぼしわかしたることの日を待し。されば先のみことを忘れしハあやまてりぞ。さこそ恨こそしめとのたまひて。御製をたまひけれバ。赤猪子うけたまはりて涙さなきのごとくよながら丹摺の袖をぬらしける。志うして衣よみくおとなりけれバ。いよよゝうみやかりて。

かづけ物さはにたまはりて。その家にくだしたまふとぞ。

古事記雄畧記をあくみぞと　御製
みもろのいつかしがもとかしがもとゆゝしきかもかしはらをとめ　又
ひけ田のわかくるすばらわかくへにゐねてましものおいにけるかも
赤猪子こたへまつる哥　みもろにつくや玉垣つきあまし誰にかもよらむ神のみやびと　又
くさかえのいりえのはちすはなばちす身のさかりびとともしきろかも

世の中にとこをとして。まりはべよハかくすむにらはまほし。

とこれハことに哥よむべき心ばとはいふ六の家いすへの哥ハ真言かくかりにも心とゞむべく小暗からざれ。随意によくよみいぶせしなり。さるを古今集の

序にも。今乃世の中色につきにけるより。あだなる哥。はかなきことのみいでくれバと。延喜乃御代のことなれ。貫之のぬしハなげきたまへり。それがうちに降りて。代々の哥の集にも。たゞ哥の道ハおとろへゆく筋を。久しくも限こそ女のすがたにちとなむるうゆく。又今よしてこれとおもへバ。せめて哥よみかなしく。男女の志のびごとをも。いとくあがれるうたによむ。さしあたりことの志のびにはあらバなり。てめづべくうちゆるをきざしれことなど。ハ哥のみちのならひたるか。人の情乃そうちらひをも

かくのごとくいひわかし。かくて此ものに。万葉集を世も
上がりたれバさらく。今乃世の人この集をえぬが多かる。
それハいと近き頃。延喜の御代の頃歌に名高く
聞えたる君達。歌乃集れ序かゝせたまへる中にも。
古の歌乃筋の。絶えとうしまへるを惜みたまひ
の給ふなり。されバ此世ハ下ちたれども。人の情ハ上つ
代にもかへるにハ。つらつらく万葉集をえせしめて
古人乃心ざまをも移し。それよりさかのぼりて。祝詞
加熊保里かしこき御宇の上つかさもらす。○橿原の御宇ハ神武天皇の御代より
ゆるさハ非代と云　誠なくよみつゝ給たまへる。歌の心ども知

しめさるむや。世に歌ハたゞちにさまと覚えさせむ
はは。いかでかはやしく作り出さむもはくべかりき
れ。べくあむるれとりふ言るか人の誠をうつれ物としまへバ。
代々乃歌人ものさまひけるごとく。ひとへに実ぬ
く歌の道をまねぶにハ。志らざありと云言之　まして
其の古の心を移さむにハ。いまへの実ある歌
のさまにまされるぞあし。浅香山乃歌の心をハ。
此に継く人も志れバ。今にハ流だらにもいとびし。万葉
巻の十六。浅香山影さへみゆる山乃井の浅き心を我がおもはなくに。これ
葛城の王みちのくにくだりませし時。采女がこの歌をよみてけむ
となごしまつりしと。古今集の序にも待るとそげり。

長谷乃宮の天皇。雄略天皇 百枝乃槻の下にいまして。
豊のあかりきこしめせし時。豊楽ハもろ〱の臣と宴したまふ御節會なり 三重
の采女 三重ハ所采女ハ氏のめといふ言なりうねめと称へたる言なり 大御盃奉りし
に。槻の葉ちり落て大御盃乃御酒にうかむ。
天皇みそなはして。その采女いかりましとのたまひ。
おほみてをのべてうちふせたまひ。大御佩の太
刀をぬきもちて。かれが首に刺あてたまふとき。
采女すこしもおそれまで。告げまうさせたまへ
ところ。御徳を百枝乃槻にたとへて長寿とよみ
て奉る。それよ天皇も御后も。ともに是をめでて

たまひ。いのちをゆるしかづけ物たまひける。古事記雄略の條に出たる言ハあそみまで
されその哥乃詠をよみいづるのよしバ偽
なきこゝろハ言れ人にいらざるし。言ハ実よかバ物
とむすく作り出るとしおもひ得ハ。いともくそむ
りぞの外ほの世よりけていゝぞ。かゝるためし数
をしらず。又かしはら天皇崩ましまして。伊須気
余理姫ハ嫡后ハ庶兄なる当藝志
美美命よあひたまふ。また余理姫の御子
皇子みな三柱おはしけるを。庶兄の君小みた
まひ。これらみな殺しまつらむとおもひ

と。與理比賣の命そのよしをしらせまくおぼし
さゐ川うねびの二うたをよみたまひしかバ。二柱の
皇子そのうた乃こころをさとし給ひて。つひにさかさまうち
みその庶兄を殺したまひ。やすらけくはかり乃
御世をしろしめしける。二柱乃皇子は御名を
日子八井命。次ぎに神八井耳命。次ぎに神沼
河耳命この三柱なり。次ぎに御代しろしめし
し八。神沼河耳命みそくれたちしまへれ。綏靖天皇の御ことぞ。又

さゐ河ゆ雲たちわたりうねび山木の葉さやぎぬ風ふかむとす
うねび山ひるハ雲とゐ夕されバ風ふかむとぞ木の葉さやげる

こまられためしをしりずとも。女とても八うたをよむ

よみたまふべし。又いはるるはそのこれあやしけれ
ど。その書のうたよみくその和歌などさば。いくら
も残るまじきひ乃よこさまなるもやさしからぬ
むや。やさしの言ハ優しといふことばにてつづることをいふ。今上よりおこることをおもはれたり。これら乃
たがひなかれバいさゝ

女のたしなめてそかゝねてハ数を云七の余
をことの為しく似げなかくもをとこてにたゝき
やうなる文字かきなる。唐書よみむろげく
おのれの異国乃ためしどりいひいづる。又頼

よかしげなる詩うたなどを。人にはよませじとかい捻
てよみいだしける。或は神仏をうらみぬりのよしひ
なしてぞとりごとをいひのしる。たとへや何とご
とまくを。女の才めきて何まりよいひ何がりた
らむはめやすからじ。紫式部はさ家も清どもおかし
けむ源氏のものがたりかも。さる筋乃はなれのにし。
かきちらされたるはかなど。そちこちらちほのめかし
てかきたまへり。○これらのたりむきは其夜乃物代みでこそ
ふるも。○紫式部が日記に云ふ 清少納言こそしたりがほよいみじ
うたてありける人。○一本云 さかしだち 一本さかしらだち

てとはり。いづれも かしこぶりをなす 真名かきちらしてはべるほどこれば
いと足らぬことおほかりがくく人にまさることとれ
りひこめる人は。かならずみえおとりし。行末あ
うたくのみなれどなりむ。正しくたがをじ清少
納言ぞ。甚をぞりはあるしりきこえまり ○清少納言松島日記と云ふ
冊子あり。これらにはをとりのさ夜いとまびしくえ更。或人は冊子は凡しうぬ物ぞとはりしたがいふよ侍りや
おればえしより。四十年之間をえるたよさる
筋よ才をそみたる女ぞ。それらじ身に何へしれ
ことをいくさ。されてくはよからぬめる旨何ひぬるを
まのあたり笑ひもえざ。さ為は紫の刀自い

さけすくれをせし時。父のまへに書よみすゝむ人
乃かたはら［側］へゆきてよく聞とゞめしかバ。そらにおぼえ
をのこにてもたらぬこそ。さいはひなかりけれと
父乃常に悔びのたまひしを。男にだに才（かど）勝（まさ）りぬる
人ハいかにぞや。はなやかならずのみ侍るめるよしを。
漸くひとのいふをも聞とめて後ハ。一（いち）といふ文字
だに書（かき）もわたし侍らじ。其のち源氏乃物がたりを
上（うへ）にきこしめして。此人ハ日本紀をこそよみたるな
めれ。まことに才（かど）あるべしとのたまひし。日本紀
乃御局とあだなつけたりける例ぞかし。いかなる人乃

ふくむらんとも。むづかしがりたまへるよしみえたり。
実（まこと）に女ハすてハかゝるこそとたりひかへられ。さま
られ人ざえをかくしよせく。讀と書さまハむぞ
よろしき。

女乃是を慎（つゝし）むべくハあるまじきてふ筋を
いさむる八の条

世に目の罪（つみ）耳（みゝ）のつみといへど。これハ我心のみ
よく捨（すて）ぞ捨べし。口の罪ハ人を損（そこな）ひ我を
もそこなふ筋ともなりゆけれバ。口ハ

たゞなりならべおこそてしいへり。唐ことにも口を守ることをハ瓶乃ごとくせよとあるなり
みだりく女そその夫乃言女に指ひ入たるを側
よりむさひ髪たれしあげく囀り出すならまづ悪し。男に
いるハ袖乃理り代塵もはきとゞといひとりく。男に
あやまちをなせるなり。いるハをとこよりくだよいる
と。女乃いるしれ臂をりかけく。下部どりの声
だうよこうしたる。呵して女をむこといひさいふむい
と情ゆし。こゝよ老し髪かく冠かり嫁りし姉かれむれ　古老女
乃。言のはくきを上へ久れ文さゆるなり　いるハ文老花なんどの孫をバはるま
ぐりなぐら。女の童なんどの抱そこすひたるとて。

にやまひこゝでいひの志るむしはこふかりれ。その夫
家にかへりぬよ。男女かいかつめて抱合ひ酒のこしはく。
見みさゆえくうちかたらふ。語いるハ独りんに行とて。昨
ぞよりいひさしれ。夜たゞに帰とよめれく。夜たゞハ夜通し也。
とよむハ富とい不言とのぞくるなりさこゞしたるをも不帰てとよむべくし　家とさともとはそうなるべ
く出たる。これハいかうにたゞく。これ等かさといふなるべし　いるハうたけなどもる　酒宴
に。言ゆとひふなりをにつめてうたけとい不　たかまりけりらて　古事記履中記ニ隠酒大銚盛其進酒などあり。
まり八国さといふ言。家ゴハ道の事とい不。　まじゆげもなくロさしよせたる。又
随分　たふなく糸川なりれてなさなどハかるべきにて。これもいつと
まぐれたるハむくし　鼓うた似たりれ。笛吹まなとろしきな

そはあそびめのりのハいふによせむ。傾城のゆかりでよハ遊さ行女婦とうそひとさう
かゝるすぢに心ゆるびぬる事なれ世にハなべてかれど。
いひさもむともむかりれ前にハいふべど。たゞとう
るく理なりもされおハ。何事にかゝはらずたゞろした
ることかうとのさハそもそもをもてで。まことに世捨人おもむきてゝ之なる
し家にはぢらひ住て。袁をいとやく帯ハいと廣
くしたるが。立居ふるまひ気も添ふしたる。又
そのとこうせさく。おもはえずとみさほだちたる
が。いかにもく髪かきちらすにはしる事ど。何
乃ことどもりにかゝはりしむ。そのほとりし八

たぬきよこそといふなれむかしがおいこよくはきて一万葉ぞそのと
らましバさしむ。すとあましバむそめられたる。ましてよめ
あくむるんふくけまし。又たそろしれハらくみ深き
ことかうど。人じがみくほりもそ成れど老婆おりそろハむさかつ乃留守このすいりを
人ところそむうれ
罪つくるおうれバあり

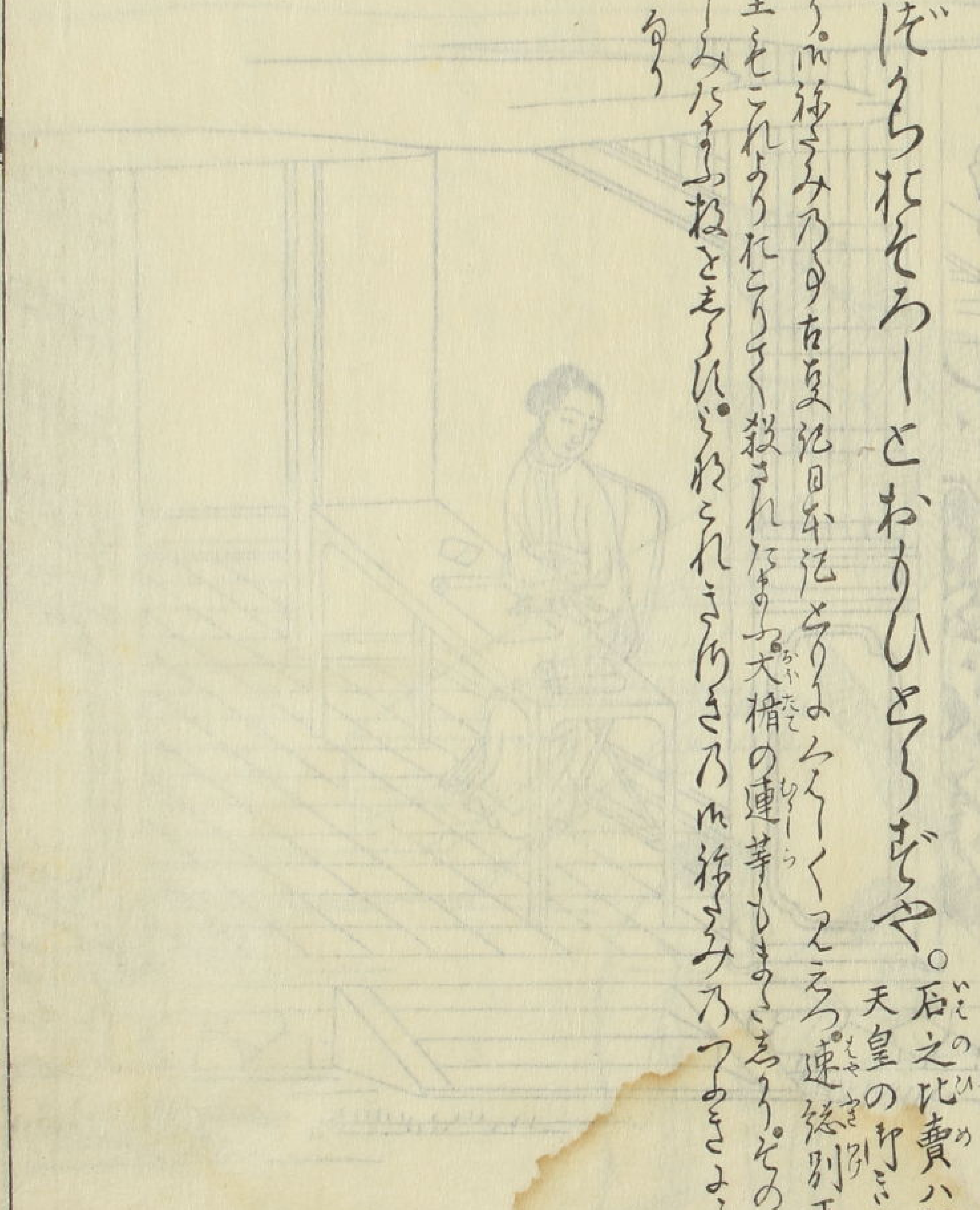
神ふみむをいさむる九の条

女乃こハよからぬてふすれなれかる中みも。これ
く嫉むのつよかゝむハ。おほうされる罪なり。
上が國よなしさむ女達ハ。ことよくさるむしそも

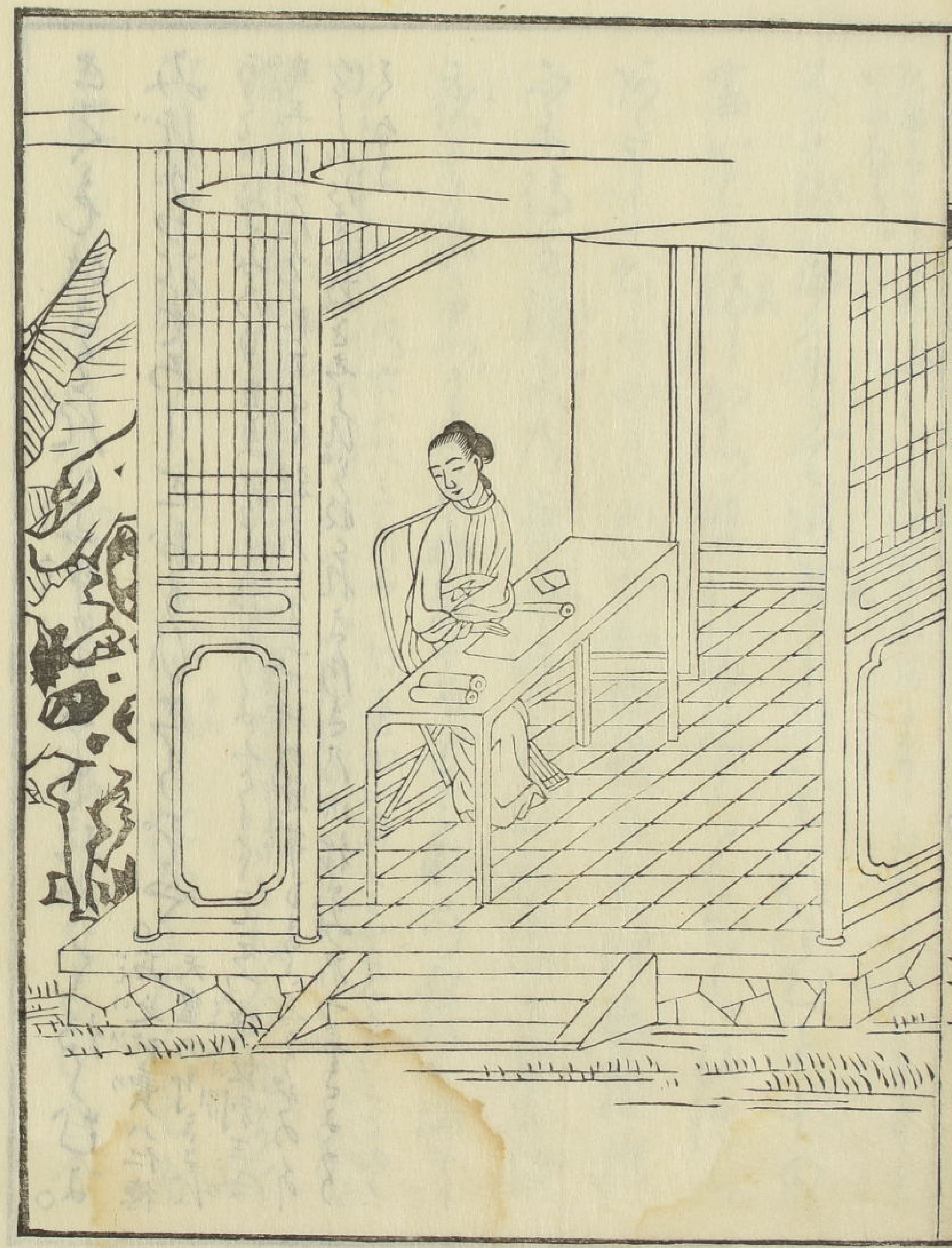
いさめのすべしがろうすれさわざるにハ多くれ人乃命にもかゝはることあれバその下(おも)れ恨れのぞらよよむくひてすぐよからぬたゝりどり侍るなのみぞ。斯よ申されすでに女達ハ如何にも何で人の作乃かしこきに所国ばく有ごとき御心筋をとぐる事世に多し。さるを得きみつよく悲さすかより事ハ己れてくいひざくむは事ハなしくて終よハ身をうしなふひとぞあるに此恨がこよかむくひを受けてむざる事ハ皆上よ立れ女達の保すとて申ハせときき ゆしく中下ざま乃女にして。はむれ侍の侍らむにはたゞちよち家をうしなひ。身ともそこなふことともなりなむ。そが故よ、この徳をみるの侍(え)るとバ、その夫(せ)さかり給べき掟(おきて)乃しるし門とせり。さらば世のことゝもうちはへぬ人ハ、親夫(こうせ)と

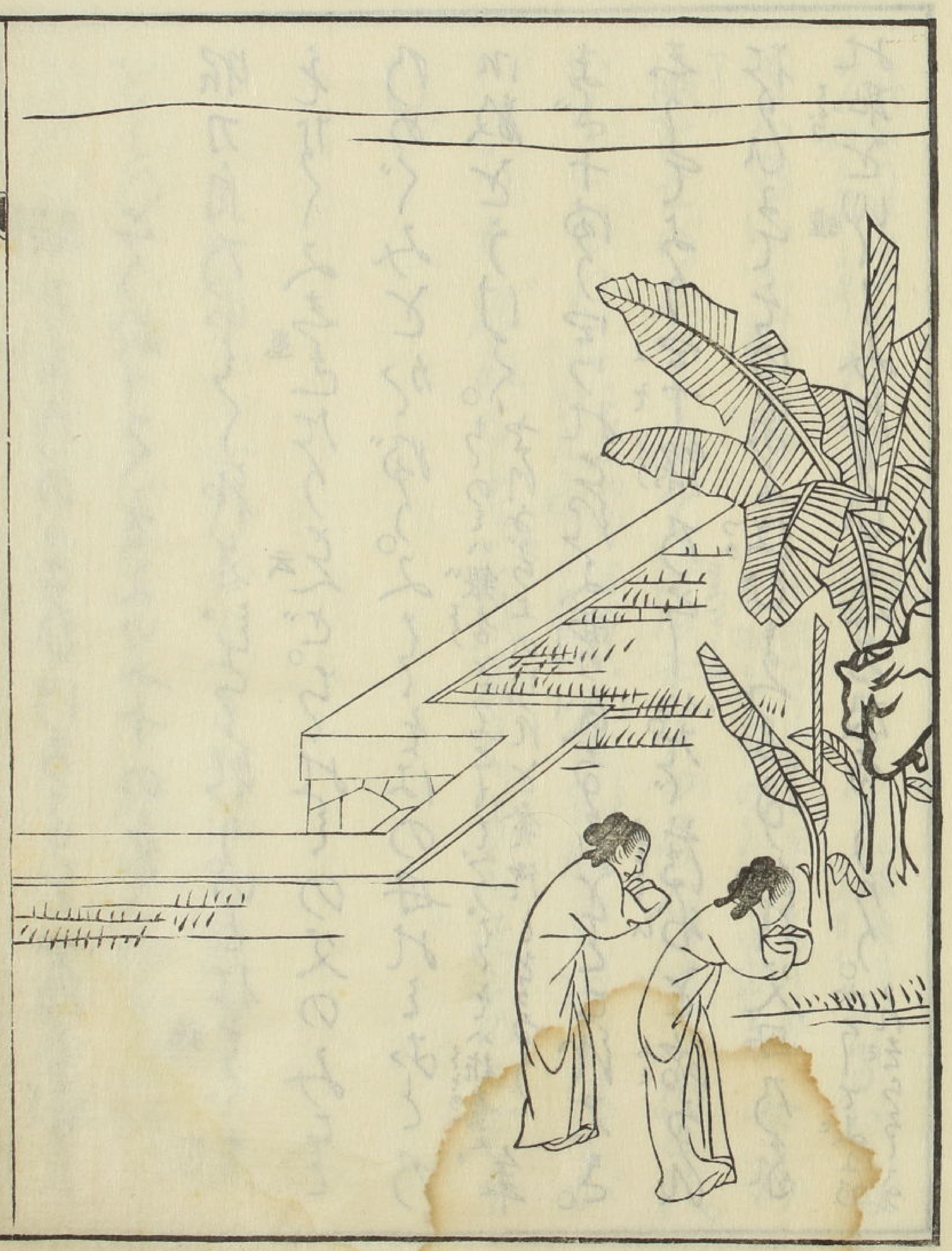
もぢにそのみだりふゆゑなぞ。孫ことハもとあり。志かハよのすとひふハたがへり。よのすわらバいすしへよりさだめおくべき掟乃むね門とやとむ。いかでその夫(せ)れ心(かくごゝろ)乃いでそれて其妻(そのめ)とバ思ひそむるべきをいふことをむ。ましく淫(みだら)すれ人ハたとへ下さ海よてもゆるべき筋なすれハ、その妻(め)ゆひともよ志かゆくむかがまへとりし。又たのみかえくだよ異腹(ことはら)乃まうけハこひのむべき筋なり。さらバ婦のこざりひとあるなをべらむ。これハ婦のためよ祝よまうけるしとおりこじざる人こ女とようけく夫(せ)の侍郎さんべきハさし何うりたる理あり。さ勝をうやかくうろさむ婦をみちもれある此ゑよ。その夫ハ行りひても心よまかせん、終よハその血筋乃

たゆるこゝろなれよかしと。これ女がたの心えにしるべきところなりといふなり。
又さはる節ありて。他し心いでたまふとも。その妻いとうらめしからぬけしきのなくてもてなして。あざしらぬさまにて。大和物語伊勢物語などにも侍る。我夫の夜々ゆくらむかたへおくりまゐらせ。夜さへやきみがひとりこえなむ。とよみ出さる。とこれの心ハうるはしからずや。○此歌ハかぜふけバ沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむと詠る歌なり。此物語ハ大和物語によくかけり。むかし石之比賣と申せしハ。御ねたみ心よくおはしたりしによりて。そこばくのたゞ人をもそこなひたまひ。それ命をもうしなはれたまひき。今



さくも此さまにハ上中下みなもおなじく侍らむよ。みだりがはしとおもひとりぞや。○石之比賣ハ仁徳天皇の御きさきなり。此御ねたみの事古事記日本紀などにくはしく見えたり。速総別王女鳥王をもこれによりてころさせたまひ。大楯の連等もおなじきこと有り。その外しかしみたまふねたみあれども。これさへ御ねたみのつよきよりなり。





昭刀自乃のまなひけることとやらと言ふよ

とりなく友よりよ十の条

昭刀自乃いとく我身もちもてありしとおそく(鈍)女
もなく文も(愚)きたりと(云)へど。ちゝみゝの父のみことを
のめぐみとかへぬかし。又そのそはの母のみことの
ね教とうけく。○ちのみハ銀杏といふともいくつちてそ八宇川子か上のむかしと発語とさるなり 柞葉之年
まず十あまり四つの年よりて曹氏なるをとこにゑんき。○
さりてより四十余(よそまり)乃ゆきしハただ孝をふみ
おもひそその家に仕むまつるなりハ。我父母乃名
ね恥を謹しみおもひそぐるなりけり。○女そしてまよなる れきさらるてふ

八我家乃恥なるを八かくれなきなり 我身今やまひ(病)にふしぬ。○痛着といふ言之 さらバ夜
きたるいきれぬうちにと。○発語なりいきも命もおなじ事之 亀極まり生のうちといふ意なり 女乃
誡(いましめ)を七の条にほそり。汝女たち乃見てなふ物とれ。○
かしこあれど これハゆづり言なり。おそれが御しれとの 吾言(よごと)かをつらむ。○ながく
いのちをしぬとも。○是こゝろえてよくよくほとあめすを
む。○

おほしく女乃むらべきむ種を教る十一条

をとねハいよもひきいてなく。○我身をおもひ退かず
され。たゞまなびゆけよいやくかなうむこそあるべけれ。○

敬とゐやといひ礼ともゐやとも云これ古言之
そのさし出じゆかとゆづるといふ

人とハさしつどふよ。我ハしたがへれよ。
まさよしすゝむも名のきこえ
となりぬれ。名のなのる事 せさとる事 くずれにゆずりても他
みれゆづりぞ。我身よりけ むけとる事 恥をもしのびゆづりしめ
に譲く。常にたゞかしこみすれなり。常に何事も かれそれ
ちかるがごとく せよとゐふ事 又たぞく寝もやく起きよ。其のつとめ のつとめ
とたこたら されとなる 貌ハいさぎよいあかぞ。身乃
まりいと面しく心清くたりくみざれぞ。
神よむひく笑ごさうえれ。神祇いやまひ遠
は祖とまつり。からバほうせざれとその子に

方よきこえ。又行れむ報ひ身よたよぶこと恥
かしむ。
妹と兄乃道とハ十二の名
たよそ妹と兄のなりのたハ。ゆめたちよいつぞ。天地
陰陽めとれきざしよそ。人乃うまれれわきみちなり。
さるハ倚のちからみも。此名の数とするむと經
むのなり。そもくとことハ陰を貴み。とされ
ハ陽れとよしとなるハ。かの陰陽乃氣れ氣の
ぞらなれる名るまじバなりけり。さ原名女の号と

とさむるハ礼(いや)にまなび。強(つよ)きにたへ(堪)るをハしたがふ(順)
にしくハなし。故(かれ)礼(いや)と順(したがふ)のふたつを女のうへに
おかれ道とれ。それいやまふとれそひさしくた
もち(持)。志さがふされそれおだやかなり(穏)。家よ妹夫(いもせ)乃
つゝしみ(慎)といへど。たゞはなやごもれる(嬬屋)うちにし
もはらむつまとあれバ。互(かたみ)にゆづらふ(交)こころ
ゆるび(寛)よろこび出む。徒言(あだごと)によりてよろづその言(こと)を
おやまちてむ。その言あやまちはまたバ。たのがま
よくいひあがりて。たやすくハ夫(せ)さへをおもりし。
ねりひそびれ筋もねとりよてむ。これ袂(まで)よその

礼(いや)をうしなへるみだれなり。ねよそ言に直言(たゞこと)あり
曲言(まがこと)あり。その直言(たゞ)といふハ品(しな)ねなくまんなくた(仕方)
した礼無(な)くいひちらすをいふ。曲言といふハ私
しく私しくこちたくいひ放(はな)ちたる代
言(こと)の葉ハ。世よ床(とこ)ごもれる離(はな)るゝ筋ともなれる
れかるなり。（床をあるゝハ妹夫の間の悪しくなると云）そもく直言ハ諍(あらそ)ひて
ひ乃ちしきなり。曲言をまもらくれ(訟)しとなる。
この言乃いそくきてハかなしび怒(いか)りのこゑな(哭)
きいさつ(噪)とよみもいそくれなむ。かゝるみだれのりとを
ねりよ。妹よく亡だり(泣)こゑさゞふむとことされさく夫(せ)を

あなどりくるものが操(みさを)をうしなひ。みだれき
ぬいひ これをはうらうといふ ひがひしきをいふ さがなく(不良)て。はぢげなし
きむとふしよりぞ。ほそひよハすれたらく家とも
みだりもてハうたる訟乃場(ば)にもとめし出され
く。しりぞけかようちさいはまふちとるむな
ふぬ。それ姉丈の反ハ。ふかや ねたみとりくなひ
さうしみ。まさそのよしみ(好)とりてうひさうらもし。
よくこれをこゝろえまへきれとぞ。

女のおこなひといふ十三の条

それ女乃おこなひに四つあり。ひとつにハいさをひ(徳)。
ふたつにハ言(ことば)。三つにハ容(かたち)。四つには功(いさをし)なり。徳とそいふさ
ほひハかならずしもそのすぐれ人にこえたるむことをハいへ
ど。又ことはそもちとく速(かど)に通ふべき筋をとも
いはず。そのかたち(容)ハ。たゞびらく美麗けさずもい
はず。又いさをし(功)ハ世にすぐれてかしこけるなど
をもいはず。さハなにをこそのいさをひ(徳)といふぞ。
たゞ心はゞくその身ハ正(たゞ)しく。恥げかましきおぼ
えなく。ねまめやかならずしづまりて不嫉(ねたま)ず。
あなどらず(不侮)。たはぶれず(不戯)。おこたらず(不怠)。しかもち

らふなふくて。女乃憲(のり)とうしなハざる。これを
その徳(いさを)の至(いた)りとし。言(ことば)ハたえて不良(さがな)さ
をいはず。たゞよろづにはゞかりてうちいづる言(こと)まよ
くからぬを。女乃言(ことば)とし。又その容(かたち)
乃うへハ。きよくうるはしくあらそはず。衣ハよろうじ
とも。破(やぶれ)ほころび垢(あか)はらでうつくしきなむ。その容(さま)ハ
いたりとし。ほころびハ綻(かこうび)縫たてをいふ。又いさをしのみ
ハ縫ひとるいとを紡よりはじめて。糸を
蚕(かひこ)をそだてしれ。ことにもそれぞれのかひこをよ
しかけて。飛縄(ひづ)人乃みちれ。蚕(そそ)縄(なて)たゞひとつみ

ちよにすまとるなむ。一言とは序の何よりて。飛縄人ハ大工なりまらうど飛縄にかなを名とすると云ふ。飛縄ハたとへば此なの響(ひびき)
又たやすけからずしれ。賓客(まらうど)と向へバみだりがはしく
ものいはずして。日本紀(やまとぶみ)に盛(さかり)とよくさかえ
など。このこゝろをよくあらはして女乃並(たぐひ)なき大徳(おほきいさを)
ほひすぐる。これなむかならずおしへなり。
たゞそのがたとりこそなむいふとなり。

むこをとる十四の条

をとこハおもてびめと婚(めあはす)ことをし。女ハおもてび男
拙をび。故(かれ)夫(せ)ハ天(あめ)なりといふことなりいふしく

夫と妹と云ば。おもの覆へるや。それがたみをち
まむりの。いづこにその夫とのがれてむ。まさ妹の
その夫(せ)にきこゆる。いでこみかそれ夫(せ)とちぎれく
む。たゞその紙夫のむとうようなとおがく終をえる
といふ。文ち給を夫(せ)乃むとうにらしるふとながく
背むくといふ。ゑうひとうとそをわる言よ むとそめてくらべし それ妹とも夫八丈
乃むとうけえびそいらじ。ちうとてくすみ媚あび
諂りて夫乃むしも得(え)よこそはあらび。ひさふ所
紙のむともそん色を正(たゞ)しく一致(や)とあるべし。
媱みづりごとを耳よ觸れぞ。悪事さことを目よふれぞ。

違言たがことをちよいたび。出るばちれや華麗くよそは
はぶれへるばかざりとそのふべし。さるそかく櫛筒ね
とちねしていそじ。是ふくハるぞ身かざりむかしげ
なる黄楊小櫛はすれとぞそこしむこそもわ不思じとよめる云
乃むだんるり。万葉巻九にえたり廿八丈のひとりよこせむとさこそかち作まとよめる云乃ゑるり
などちはとひてさへ轉ざるすねられ。倫しさと男
こど共もとをや。又ふ(こ)みたちく拍へるすなられ。是
らと。むやかもちにかちの色を正(たゞ)しくきるすと
いふかしからくしくうちふるすひ。え竹を立るこそ
みぶりがそうしくうちよ何まハらちとけさく数(くえ)と書(まき)

おげるども。外(と)に出ぬれバ紅裳(あかも)裾(すそ)ひき(？)そぞろちなてけそふ作しくもてなしむよハ。たよそかくれと色とも
るよ所なしもいなし。いせ物語に河内の女のくしめこそ心にても
おそなき。いまハうち解てところ男乃入れそりしたるさまもかく家筋なり。女子夢乃おもしみこそ知べき
なるさまに。さみに出るよハ身をかくすものほどおしんと。いやしくれ
やさしくもてなすハそこそ知りなめしるなり

和(やは)らぎて志ざしふかく敬をとふすべ人の家
たよそ夫(せ)むそられ色とも家とも。それ姑(しうとめ)のこころよ
のりびハいよりしてるべく従ふなり。のりてハ家まれ人よ多く
心(こころ)のこそばなり。今のたびまかけて志ざしふよられハ聞
よおりのるハかけほい
世のも人そりなめる

し。嫁(よめ)とりてそ其(その)ハものがまなり。是(これ)ハたがひなどいひ
あらそふ争(あらそひ)ハ。志ぞとめよ志ざしふかくよえらび。左右(とかく)をも
右左(とかく)も姑(しうとめ)乃めで愛憐(あいれん)しとたがひさむよこそ長(なが)
くその夫(せ)よハ仕(つか)へたふせめ。さ家ハ夫よ志ざし
て身を姑(と)へむとたりくでまかり小姑ぞうとわ(るご)
まづし。さ家そ小姑よ従ふるハ姑の刀自(とじ)よ従
がふるなり。志ざしとめよ従ふ家ハまわよ親夫よ仕
ふるなり。夫よ従ふるハ親父母(ちち)よ従ふるなり。
父母(ちち)よ従ふるハ祖家よはふるなり。家よは
かふるハ遠(とほ)つ祖(おや)よ従ふるなり。どれつたや

よはふるハ。天地(あめつち)の神にはゞかりたてまつる也。
さハいひまして嫁たらむの道をわきまへ。たゞしづかに
志たがふにハ志かず。そもく黙(もだ)すハいさをし(徳)の
もと(本)なり。志づかなるハ又女乃れいなり。ふたつ
のすハよく人をあいしまたまことをいふ。十條より十六條を 女誡七章乃むねを志るせ

親の心にかなひ嫁の道をまもるはふたつ
乃教をいふ十六の條
父をよくまもりとこれ子を教ふべく。母ハよくとこれ
乃子ゆゑとゝめべし。そのまうけ(?)ざる乃すハ躾(?)ぬ

上乃條(くだり)々にはなしつれどもつぎ/\かゝれバ
女とうまれバ。その子を三日めにゆだ下坐(しもざ)にあそばすなり。
まはがまあれざ谷乃物がたりにいひしをとりて。
和名反轉これとひあれとふ。あかるす見えり万葉の歌にもこえたり　さとくその下坐にませ
まるすハ。やさしく志れ乃うちハ。たゞよく志たがへと
いふをしへと志めしたまふ。又家にあるそれぞれへより
やそびハ。男れをたてまつり。女れはさがさとれ
ふしれ乃とふと志めしたまふ。又織
御衣(みけし)をもつくりて女乃手末乃貢(たなすゑのみつき)とたてまつるとなんいへり。○日本紀崇神紀ニ此ヲ謂ニ男之弭調女之手末調一也　さればハ女のまで

まれ女のわざにしてたくはふるみつぎこれなり。
しかるに今の世にハさることもしらねバ。はたのはた
らきもへのふうぞくもうつりゆきぬれバ。はかなくも
今めかしくうちなれやぶれ。そのむかしめなどぞ。
潮しなのそばとかきたる。ころより。ふるくハ雛段の紫宸殿の二房き。
まなびのはじめとなりし事。ひとさしの女の事も見えたり。ふかくよ思ひめぐらすなどかいつたへ
なるさきもハうちわすれたることなるをきけバむかしの
まねびとしてもしきしぶかくいひ。まして縫ひ
はた織る事どもハさのみもせんぞ。ただ糸の
うたふなどぞこそ。女のたしなみなるに。

きぬかく。是とよりてよき人なりし。これらによりて
衣をきぬやバよりしくおのおのぬりしも布
をし。おのずから染むるなきぞしてぬりしも
なりたりし衣。ハかなくさるもひとしくなれ
るもとしよりハ。はたのはたらきわざの人と
もなりひとのほどよ。さればきハなりてた
まなびさやぞれさへむかしてる人ハ。女の
いとなみハただしなりとまよりひとすみ織
そめるよ御なりしたふ。はしくいざなの
人よしくかかる衣なれそ行ふぞや。さればそ

世の中れさまにはまとく。彼ゆようたふとざるを
乃かひなれそ。いろく釈乃品かりなどなりひ
たぐひく。ざ品なりうちはれ世れたるはそびるなどに
ハ。ただ他乃子にあさらむるやこひのむすぶぞ
そのうたふわざうたハ。わざうたハ咄称のさき日本紀にもみえたり はさ満し
くうちみぶれたるあざこそにぞこれさきへべく
はあそくうたへバ。ものづからをとなもしさるはざ
こと乃ならぬざさみ。神にもかかはあるなれども
ざるより今めにくみざりがたき男女乃あそび
ごと侍も。ゆるさるひとくゆくまじばやざる

る侍なりへバ。彼うちはかりたりこハ好まぬとりふ
文のみちにハ。ものかなはとりけらん。又世にまさもの
ならんを称そのむかしをあられくるハ。ととこまそ老
たるもりもよきれすとしかり。うたふとざは
りもうにあくなさく。はにハそのそあよ釈もち
からもとまるをひとそるるにおし。こハまうさ山乃
ましらにあとどうはおいて。たのもとがたくきと
そろみとも好れどはまバ。敬なりしより世のそのみちにハ
入用ゆるさるにぞあれども。これハ世の遊けまぐ
まるるゆゑもとて。ざれるさる人乃性さるとざと習

かしこくたまくまらうど(賓客)れいをうくるときハ、いと
そふくかしづくべきと。かへりてれいのましがむこあれ
さむらふに。むこをひとせさくれさうねよたえまつる
むすど。その父さへいふまでもなくその母ハ更(さら)なれ
バ。いとされ(雅)なるこ(是)そいひつくよろこびとなりひとく。
れのつちら人乃かりそくあそびぐさとするこそは
まうび。かゝるときハその母ぞよくよく万みさいまあ
たまふべきなるわり。又まう(姑)とあハ人のむこあとれ
く我まるご(真子)よいとせ。是が親とさくるらりの
なれバ、しるふうそのよし(儀)みとれりひとつて帰(かへ)

くむとかちらうべきなまよれん。かりしよりめおひ(婚)
そ敬して。そのさ(齋)きと結さずとなぞるのきまば。
そのまれなる嫁(よめ)としよかりむよハ。何かいむと川姑
乃むとそむるなりまべからん。まう従よ世のうち
ひそしく。まうとあ乃嫁とおくむてふなり。中ト
ざ夜乃人よハ拙し身をくみね志うり。こハたなよ敬
とむをいくとまよいてむをも。はゞさなるれバかずし
ぬ。ぶ嫁よそむ姑とみるよ。かなしびさうしら
よく（さかしらハ逆智にて。ザるこ家がこれ とひよのるゝ方業第中よそゝこゑう）拙よくいとひとり。
はそち波節とより而とさぬうどり伽ひた

はなるよりわざ(ひ)にハそのまれ子ゐのかよその妻(め)と
離(さか)りたるためしいとおほし又さる姑よくなし
めらまじく里(さと)がちよそぢらひふしばるハみにくみも
あり或ハ身ばうちやいどよかまして命をとりし
なひけるなどそまのはなうのちもてあつかひごとき
これその姑乃ゐのはるだとりて人の子を殺
きるわりがくれどろくしぬゐハなにゆくれを
出し後なのちも何びとと知ぬさまなり。
その母乃よくとし人ざるが人となりゆくつひ
にハかくゐとりて人をそこなふことなきもの也

なりて人もくそのわかしハその母乃としごろ
る如此なりしたがゆゑに母ハめぐみと
志のびて教をとりてうにせよ。嫌(うくき)と志のぶハ日本紀景行紀のことばなりおもひて
ゐをとこへく教を吉と目よと□なり姑そまさよしみを拾ひてその
真子(まなご)よりもその嫁(よめ)とめぐしとをよぐれハ以上
彼に行乃なあり 母のみち姑のみちとらふ

太氣能綾足これを志るす 姉妹
佐姑母をちこち話からことばを
ならふ

寿女

會老堂藏板

明和八年辛卯夏

皇都　風月堂莊左衛門梓

東都　須原屋市兵衛